住まいとコミュニティづくりNPO交流会

第6回

地域交流会 in 金沢

開催日時：2019年5月25日（土）
12:45～18:30
開 催 地：金沢学生のまち市民交流館

主催／一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

後援／金沢市　　協力／NPO法人金澤町家研究会

＜ハウジングアンドコミュニティ財団　松本昭専務理事　挨拶＞

地域交流会の趣旨、助成事業の実施経緯、後援していただいた金沢市及び
協力団体への謝意などを述べました。

＜NPO法人金澤町家研究会　川上光彦理事長　基調講話＞

地元の協力団体であるNPO法人金澤町家研究会の川上光彦理事長に
「金沢のまちづくり一特徴と課題一」と題し、基調講話をしていただきました。
（内容の詳細は別ページ）

住まいとコミュニティづくり活動助成事業（地域・コミュニティ活動助成）令和元（2019）年度助成対象団体の活動紹介

１１団体のメンバーが、２０１９年４月から２０２０年３月までの助成期間で実施予定の活動内容を紹介し、各団体が抱えている課題について学識者や他の団体のメンバーからアドバイスをもらいました。

■テーマ１　復興・地域おこし

ふるさと豊間復興協議会（福島県いわき市）

活動のテーマ：地域と子育て親子で築く“めんこいまちづくり”事業
紹介者：小野陽洋さん
復興事業の終了に伴い子育て世代に移住を働きかけるとともに、
再建された集会所を地域の高齢者と親子等の多世代コミュニティを
育む場として活用し、地域の活性化を目指します。

特定非営利活動法人熊本まちなみトラスト（熊本県熊本市）

活動のテーマ：熊本地震で被災した地域文化財を中心とした新町古町地区の
復興まちづくり活動
紹介者：松波大仁さん
3年前の熊本地震後に発足した被災文化遺産所有者等連絡協議会の
活動をアーカイブ化し、新組織設立を検討するとともに、歴史を活かした
まちづくりを発信するイベントを実施します。

子どもの元気は地域の元気プロジェクト（新潟県佐渡市）

活動のテーマ：過疎集落の空き家を交流型シェアオフィスに改修し、
隣接の古民家再生宿と連携した持続可能な地域づくり活動
紹介者：山﨑聡子さん　渡部晴奈さん
古民家宿の隣りの空き家をシェアハウスに改修して、宿と連携して
来訪者と住民との交流や情報発信拠点にするなど、子育て世代の雇用を
促し地域に子どもが増えることを目指します。

一般社団法人ヤマノカゼ舎（岐阜県揖斐川町）

活動のテーマ：山の保存食カフェを拠点にした里山資源の活用と持続可能な
集落づくりの活動
紹介者：森本好彦さん
所有する古民家で里山の資源を活用した保存食をメインとしたカフェを
オープンするにあたり、水回りの設備などを改修整備して、若い世代による
山村での起業を促し活性化を図ります。

■テーマ２　コミュニティ・里山保全

おむすび倶楽部友の会（東京都三鷹市）

活動のテーマ：みんなが楽しめるプログラムで地域サロンをつくろう
紹介者：大久保隆さん
都市型高齢者（元気・好奇心強い・経験豊富）が孤立しないよう、
空き家を改修した居場所づくりを進め、PR誌などの広報にも注力
することにより三鷹のモデルと位置づけられるようにしたいです。

桃谷ロイター実行委員会（大阪府大阪市）

活動のテーマ：多様化したコミュニティの相互理解と交流の
「深化」を図る活動
紹介者：伊藤千春さん　川口万喜さん
地域の魅力の発見・再確認から多様な住民をつなげる情報誌の
継続的な発行と交流イベントの開催、地域に根ざしたものづくりと
タイアップしたオリジナル商品の開発を行います。

ECO villlage SHELTER project（新潟県新発田市）

活動のテーマ：森の循環物語ーバイオマストイレの設置と一体になった
里山の森林整備活動
紹介者：鈴木梢さん
商業施設に隣接した森にエコビレッジを整備し里山保育活動を
行ってきましたが、利用者からの要望により皆でバイオマストイレを
つくりあげることとし、資源の循環する村づくりを進めます。

重利の山を守る会（京都府亀岡市）

活動のテーマ：住宅地に隣接した手入れの行き届かない里山を
安全な里山へと守り育てる地元住民によるモデル活動
紹介者：長瀬清澄さん
住宅の近隣の里山を間伐しながら整備してきましたが、整備に加え、
木工教室やコンサート、防災訓練等も継続して行うことにより
若い職人や技術者にも参加してもらえるようにしていきます。

■テーマ３　歴史的建造物を活かした地域づくり

**特定非営利活動法人龍ヶ崎の
価値ある建造物を保存する市民の会（茨城県龍ヶ崎市）**

活動のテーマ：地域の宝、歴史的建造物である
「竹内農場西洋館」の保存に向けた手づくり冊子の作成活動
紹介者：前田享史さん
地域の史跡で観光資源にもなり得る赤レンガ西洋館「竹内農場西洋館」
について、来歴等を調査しPR冊子を作成することで、市民や関係各所に
建物の存在価値の周知を図ります。

つげ野の森市民ネットワーク・黒谷プロジェクト（愛知県新城市）

活動のテーマ：伝統建築再生に伴う学生への技術継承と里山体験空間の創出
紹介者：生田京子さん
学生が、宮大工の指導によって伝統工法で参道沿いの古民家の
「忌門」の修復・復元、蔵の修繕を行うとともに、子どもに中山間部での
遊びや祭りを体験してもらい活性化を図ります。

はならぁと宇陀松山実行委員会（奈良県宇陀市）

活動のテーマ：甦れ文化の中心ー伝建地区内に残る芝居小屋「喜楽座」の
保存と継承に向けた地域活動
紹介者：田川陽子さん
明治後期建築の旧芝居小屋の保存活用に向けて、建物の価値を見出す
調査や活用イベントを実施しながら、行政の参画も得て安定的な
運営管理ができる体制を検討していきます。

団体が抱えている課題に対して参加者からアドバイスをもらいました

■活動を地元の年長者へ説明する必要があって、活動のスピード感が薄れるのはどうしたらよいでしょうか。

選考委員／山下馨（山下馨建築アトリエ　代表取締役）
都心でも長老とのコミュニティを図ることの難しさ、昔からの地域のルールがあります。挨拶を欠かさないこと、とにかく謝ることで私たちは乗り切ってきました。また、そういうこと に無頓着ではいけないとも思います。

■活動の持続性（財源や人材の確保、世代交代、稼ぐことなど）をどのように保てばよいでしょうか

評議員／安島博幸（跡見学園女子大学　教授）
地域では何かが動き出すまで時間がかかります。長い視点が必要です。皆さんの活動紹介から自分の専門の観光と関わりがもてそうな取り組みが、たくさんあると感じました。交流人口の視点から考えていくと人材の幅が広がりそうです。

評議員／小林郁雄（兵庫県立大学　特任教授）
継続と自分たちがやりたいことには相反する面もあると思います。都会 だと行政と連携するのは潔しとしないかもしれませんが、地方では行政が市民活動に何ら かのカタチで関与せざるを得ない状況にあると思います。継続性を考えると、行政とどのように手を組むのか考えていく必要があるのではないでしょうか。

特定非営利活動法人金澤町家研究会　理事長／川上光彦
私たちの団体には大学の教員が多いこともあって行政の委員会などに加わってきました。施策展開の際には委託というかたちで行政と関係性を持って、そこで得られる委託事業費は、活動資金として大事なものです。地方都市の場合は、行政と市民、大学等が良好な関係を築いているほうが活動の幅も広がるのではないでしょうか。ただ、市民団体は、行政の下請けにならないように、自主独立の気持ちを忘れないようにしてもらいたいです。

■地域の歴史的建造物を残すという大きな目標を達成するために、市民団体がどのように次へつなげていけばよいでしょうか

川上光彦
需要と空き家の所有者をどのように結びつけるかなので、行政ではできない役割を市民団体が担えばよいと思いますが、需要が見込めないところは、他から人をひっぱってきて新たな需要を興すことになります。ですがそれが出来る人はなかなかいません。
実際に活用者を探す、所有者から安く借りて改修してサブリースするということは、NPOでは限界があって難しいと思います。私たちは、一般社団法人を設立して2年ほどになりますが、現在4～5つのプロジェクトを動かしつつあります。

■全体を総括して

山下馨
ビジョンより活動が先だったという話がありました。活動しながら考えるというアプローチもあると思います。 また、復興はどこの地域でも考えなくてはなりません。まちが被災した場合、自分は、そのままの神楽坂、そして今よりいい神楽坂に仕立て直したいと考えています。２つの団体（豊間と熊本）には、その道筋を示してもらえるような、モデル的なひとつのヒントにたどりついてもらいたいです。

選考委員／関由有子（せきゆうこ設計室　代表）
建物の保存活用では、NPOで始めて次のステップにいくときに個人では限界があり、営利のカタチをとる必要が出てきます。モノの販売やイベントという一過性の方法もありますが、映画を一緒に見た後カレーを食べながら映画について話し合うといった体験を共有することも、いまの地方で生き残る方法のひとつではないかと思います。

安島博幸
地域づくりでは人材が大切で、よそ者は、単によそから来た人ではなく、他の分野のスキルや仕組みに精通した人がその地で革新を起こしているのだと思います。そして、好きで、関心があって、面白がって活動する人があってこそなのだと感じます。

小林郁雄
神戸では最近、土の人（地元の人）、風の人（よそからの人）、水の人がいないと活動の種が育たないといわれています。色々な人が色々なかたちで、皆が協力していくことが重要です。

＜NPO法人金澤町家研究会　川上光彦理事長　基調講話＞
「金沢のまちづくりー特徴と課題ー」

金沢大学名誉教授　川上　光彦
（NPO法人金澤町家研究会理事長、金沢職人大学校理事長兼学校長）

金沢のまちづくりについて特徴と課題を私の経験からお話しいたします。
金沢は城下町としてよく知られていますが、都市の発展は、金沢城のところにつくられた真宗系の寺院を中心として寺内町が形成されたのがはじまりです。城下町時代が長かったので、現在残っている歴史的な資産のほとんどが城下町時代のものです。明治維新以降の歴史も長いので、重層的に歴史的資産が残っており、また、戦災にも合わなかったため、まちなかに歴史的資産を多く残しています。
藩政期の絵図を見ますと、金沢の城下町は複合型と言われます。河川と台地に囲まれていることから戦略的な地として選ばれ、小立野台地の先端に金沢城がつくられ、その周りにお堀を廻らせていました。都市の構造としては、地形のため複雑に見えますが、同心円的で放射環状的な都市がつくられていました。
昔の身分制による土地利用の分布をみると、階層的に分かれていることが分かり、寺院群は戦略的に配置されています。道路面積は8%程しかありません。バスなどが通る幹線道路は、市電敷設のための拡幅や都市計画道路の整備によるものですが、その他のまちなかのほとんどの道路は藩政期につくられた街路を現在でも使っています。この後のまち歩きでは里見町界隈を歩きますが、ほとんどが藩政期時代からの街路です。
このように、金沢は近世城下町の特性をよく残した中心都市であり、歴史的な資産を活かしながら、近代的都市として産業活動が活発な安全・快適な都市づくりが主要なテーマとなると思います。
第一の特徴としては、国の制度と条例の組み合わせによるものが大きな特徴としてあげられます。国の制度としては伝統的建造物群保存地区や歴史まちづくり法による各種支援、自主条例としてはこまちなみ保存区域や用水保全条例などがあります。金沢市におけるまちづくり関連の自主条例は、1968年「伝統環境保存条例」がまちづくり関連条例として全国で初めて制定され、それ以降、多くの条例を制定し運用してきました。自主条例による高さ規制や眺望景観などそれぞれの条例による制限が何重もの「網」となり、歴史的景観が保全されています。第二の特徴としては、行政と市民の協働によるまちづくりです。地域コミュニティの活性化や町会活動、交流施設等の整備や市内で活動するグループを対象とした支援事業などがあげられます。歴史まちづくりの分野では、金沢職人大学校の設立やNPO法人金澤町家研究会等市民団体の活動があげられます。
以上のことから、金沢の歴史まちづくりの特徴・実績としては、地域の歴史性・特性に合わせた仕組みで、それらが中心部に重なっていることから中心市街地の活性化に貢献していると評価できます。ただ、課題は、文化財の保存行政の仕組みを基本としているので、暮らしや地域の活性化は施策の対象外となり、自治体レベルでは解決でき難いものとなっています。また、防災については特別消防対策区域として対応が図られており、防災まちづくり条例をつくり、金沢市と住民が協定を結び、市が道路やポケットパークの整備を進めています。しかし、まだまだ不十分で、建築物も含めた対応が必要と思います。金澤町家の継承・活用を進めるため、京都市を参考に、取り壊し等の事前届け出制度や建築基準法の適用除外条例が2019年3月に制定されました。これらについては、今後の運用が課題となると思います。また、交通計画や暮らしの問題も取り組む必要があります。
歴史まちづくりについて一定の仕組みができ、新幹線効果で観光客等が増えていることだけに満足するのではなく、「暮らし」や「地域の活性化」にもしっかりと取り組む必要があると思います。

＜NPO法人金澤町家研究会の活動紹介　豊島祐樹＞

NPO法人金澤町家研究会のこれまでの活動についてスライドを使って紹介してもらいました。
2005年に発足し、町家を利用した交流事業である「町家巡遊」、「優良金澤町家」の認定、調査事業など、金澤町家の継承・活用に向けて、多様な活動を行っています。

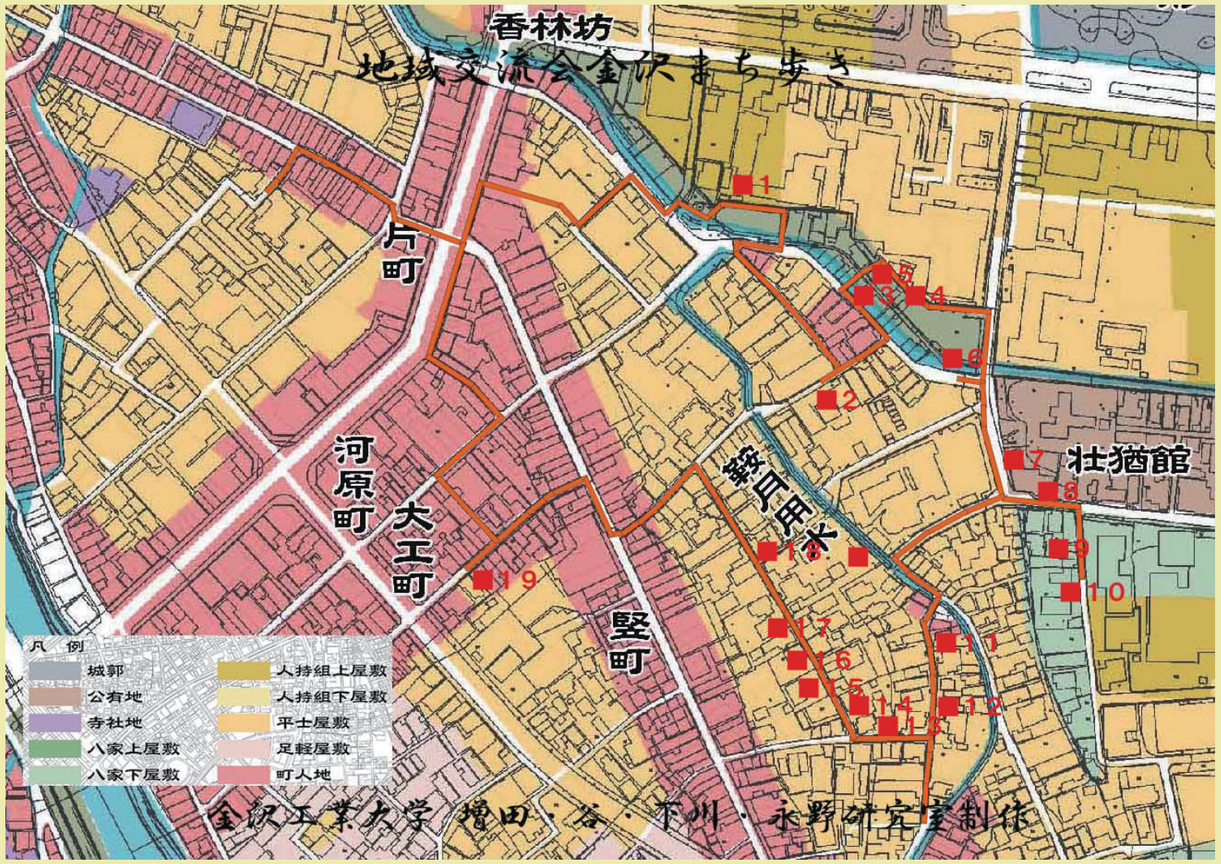
旧北国街道をめぐるツアー

町家修復現場見学会

イベントブースでの情報発信

石川県金沢市　まちあるき

金沢市の中心部の歴史的建築は、金沢の気候風土に合わせて、住まい、商い、作業場などの建築空間として発展、継承されてきてる。建築的な技術だけでなく、都市の生活や文化などと密接に関わり、それらを包容する都市空間として長く機能してきたものである。城下町時代などこれまでの歴史を多世代にわたって継承してきている最も金沢らしい文化的な景観であるといえる。
今回のまちあるきでは、金沢に残る歴史的建築を中心に、用水や惣構堀などの歴史的資源を巡った。

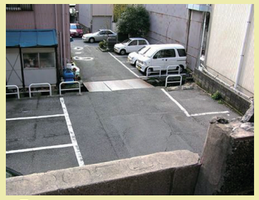


1

2

3

4


5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

まちあるきの感想

短時間ながら、町の骨格から、町家の作りまで解説していただき大変勉強になりました。楽しかったです。

町家と寺院が中心の京都と違って、金沢には 武家屋敷が多く残っていることが、新鮮でした。
全国のいずれの城下町にも言えることですが、金沢の街にも中心性（シンボル）があり、空間的な分かりやすさと、街のプライドを感じました 。
バスの運行や街の標識を見ると、金沢が、観光で生きようとする姿勢が明確に表れていました。

旧い地図を携えながら、解説をして頂き、理解が深まりました。有難うございました。足軽が住んでいたであろう家など、昔を想像しながらのまち歩きは、とても楽しく、それぞれの町家が「シャン」として誇りをもって存在している感じがして嬉しく思いました。町を流れる用水もきれいに保持されており、ゴミもない清潔さに、金沢人の心意気も感じました。金沢はいろいろな意味で「豊かな」町であるとの感想を持ちました。

金沢は京都とは違う、というプライドをビシビシと感じ、小京都なんて表現、地元の人の前ではすべきでないなと思いました。あれだけの都市でありながら昔と同じ幅員の道が沢山残っていますし、惣構えの跡も大事にされていました。

高度成長期からバブル期にかけて、歴史資源を大事にするんだという行政の覚悟の強さが、現在の大きな財産につながっているのでしょう。
350年前の絵図を見ても現在地がわかるというのがとても良かったです。武家屋敷では、絵図の苗字が現在も沢山残り（末裔が今も住んでいる!）、人の歩留まりの良さも、素晴らしいと思いました。

以前の町割りの名残でしょうか、高層ビル同士の間に、向こう側の路地迄透けて見える空間が残されているのがとても印象的でした。
武家造りや町家の様式美が保存されているせいか、まち全体に無言のデザインコードという圧力があるようで、近代的なホテルなどにも取り入れられているのがさすがだと感動しました。
土壁など、色々な工夫をして残そうとしておられるのがよくわかり、感心しました。

最も印象的だったのは、町家研究会メンバーと地域住民との信頼、信用関係が醸成されていることでした。ご自身の住居の歴史的、様式的価値をよく認識し、ともに自然体で「残し、伝えていく」姿が垣間見えました。
区域の町家について詳しく研究がなされており、石垣、門、建物、庭の形態から階級や時代を適切に説明いただき、古地図等と対比しながら理解することができました。
正味45分のまち歩きの中で、目と耳から入ってくる情報の量に圧倒されましたが、その中でもテーマを絞って見ていくと、面白い研修ツアーになると感じました。

参加団体からNPO法人金澤町家研究会への質問&回答

【自治体との協力関係が親密だとお見受けしますが、どのようにして関係を構築していかれたのでしょうか？】
大学教員の場合は、景観や歴史まちづくりに関連する市の委員会などに参加してきました。また、大学の研究室として市内の調査研究などを行ってきていますが、市から委託事業として調査を依頼されることもあります。

【金澤町家を守るうえで、所有者さまの気持ちをいかに修理に向かわせるか、というところでの苦労が多いことと存じます。「こういう制度ができれば、もっと救えるのに」と、お考えのものがあれば教えてください。】
市が改修の補助を行う場合、文化財的な内容にこだわり過ぎる、年度予算なので少額でも2箇年度を要する、などの問題があげられます。例えば、軽易で少額なものに対する制度を設ける、市の権限と財源を、NPO団体などを含む公的団体に委譲していく、などが必要でしょう。

【まち歩きの案内をしていた人たちの職業、経歴は、どんな方たちですか？】
増田達男（金沢工業大学教授、金澤町家研究会理事）、坂本英之（金沢美術工芸大学教授、金澤町家研究会理事）、馬場先恵子（金沢学院大学教授、金澤町家研究会監事）、橋本浩司（橋本建築造園設計代表、金澤町家研究会事務局長）です。

【町割りがほぼ明治以前の状態で維持されている理由が改めて知りたいと思いました。大規模再開発を免れるのは容易ではなかったのではないかと。】
わが国の都市づくりは、幹線道路整備、拠点的な地区の都市再開発、郊外開発に集中投資されてきました。その結果、市では、その対象にならなかったところが残ってきたもので、積極的に残してきたわけではありません。ただし、東の茶屋街は、地元や経済界の方々などが残す努力をしてきました。また、長町の武家屋敷近くを通る都市計画道路について市は事業化しない方針で進めてきて、近年、計画が廃止されました。

ハウジングアンドコミュニティ財団について

ハウジングアンドコミュニティ財団（以下「本財団」）は、豊かな住環境の創造に貢献することを目的に、平成4年（1992）年に財団法人として設立され、平成23（2011）年4月に一般社団法人へと移行しました。本財団では、世代を超えた良質な住環境をつくり、活力ある地域社会を構築するためには、市民の自発的な地域づくり・住まいづくりが不可欠と考え、このような活動を支援することを社会的使命として参りました。
1993年から開始した「住まいとコミュニティづくり活動助成」のこれまでの助成対象団体数は399団体にのぼります。

地域交流会について

市民活動団体の交流の機会を増やし他団体の活動の実態に触れることを目的として、助成対象地域（協力：助成対象団体）にて2014年から開催しています。
第1回（2014年）開催地：三重県伊勢市
第2回（2015年）開催地：新潟県上越市
第3回（2016年）開催地：兵庫県たつの市
第4回（2017年）開催地：広島県尾道市
第5回（2018年）開催地：福井県小浜市
第6回（2019年）開催地：石川県金沢市

Housing and Community Foundation

発行
一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
〒105-0014
東京都港区芝2-31-19　バンザイビル7F
TEL　03-6453-9213　FAX　03-6453-9214
http://www.hc-zaidan.or.jp